

ドゥンリリミス寓話「魔女
と王さま」(後編4)



2023/02/23



エリー



目次

本文	1
----------	---

本文

01 絶望と希望と

春の嵐が吹いている。

モモという名前の12歳の少女が、ぼろぼろのほうきを手に崖の上に立っている。

ほうきにまたがり、空を飛ばうとしているのだ。

一度も、ふわりとも浮いたことがないというのに。

空中でニニーがほうきにまたがり空を飛んでいる。

モモが叫んだ。

「止めないで。この高さなら今度こそ飛べるかもしれない！」

ニニーはうなずいた。

「止めないよ。飛んでみな！」

まさかの返答にモモはひるんだ。

落ちれば死ぬ。

村から出ることもできず、農奴の子どもとして、畑仕事で人生を終えるなら死んだほうがましだ。

そう思い込んで最後のチャンスにかけにきたのだが……。

突然、激しい追い風が吹く。

あ！

モモは崖から落ちた。

体勢を立て直すまもなく、ぐんぐん地面が近づいてくる。

死ぬ。

目を閉じた瞬間、体がすごい力で引っ張られた。

見上げるとニニーがモモの腰に手を回して地上すれすれを飛んでいた。

地面には落ちた衝撃でバラバラになったほうきの残骸が転がっていた。

ニニーがいなければほうきと同じ運命をたどっていた。

それでもできたかもしれないという「やらない後悔」をさせないため、危険を承知で飛ばせたのだ。

モモは思った。

ニニーにはなにもかもかなわない。

でもわたしにもできることがまだあるはず。

ここで死んだ気で頑張ろう。

02 辺境使いニニー

3ヶ月ほど時間を巻き戻して冬から春の話。

二十歳になるニニーは、辺境使いに決まると4月を待たず、冬のうちに山奥の村にほうきで単身赴いた。

ウツギやイイギリやアーモンドが来るまでの間、村や森の様子を見て回った。

表面上は魔女を尊敬しているが、祈ればグリーンさまが救ってくれるという古い僧侶の教えを信じている人が多いと感じた。

変化を嫌う閉塞的な村で改革を行えば、抵抗されるだろう。

まずは何を目指しているのか、はっきり伝えよう。

春になり、ウツギとイイギリとアーモンドが到着して、村の広場で就任式が行われた。

そこでニニーは長い挨拶をした。

「はじめましてニニーです。

村が貧しいのは、現金収入がないからです。

農作物を作ったり、木を育てたり、自給自足の暮らしをしていますが、足りないものがあります。

買うためにはお金が必要です」

そこでニニーは話を区切った。

村人たちは、その通りなんだが、どうやって収入を得るのだろうと興味津々でニニーを見つめていた。

「街に出て、金を稼ぎ、村にお金をもたらしてくれる若者の育成が急務です」

驚く大人。

喜ぶ子ども。

広場はざわつき始めた。

たたみかけるようにニニーは続ける。

「身に関係なく、子どもたちに機会を与えます。

自力で考えて行動できる子どもは、街に出て年間10万ミミの仕送りをしてもらいます。

自由を金で買うのです」

意外と厳しい条件に自信のない子どもがもじもじし始める。

その様子を見たニニーが、ひとりひとり顔を見詰めて諭すように続きを語りかける。

「村に残った子どもたちは、家族ではなく、村の子どもとして、街に出た子どもの代わりに村全体の手伝いをします。

街に行かない自由も認めます」

安心したような気の弱そうな子ども。

意欲に燃える気の強そうな子ども。

失敗を期待する冷やかな大人の視線。
成功を願う無邪気な人々の笑顔。
色んなものが交錯する広場で、締め言葉をニニーは告げた。
「教育改革の実験をこの村で行います。
成功させて全国に広めることがわたしの目標です。
みなさん、協力していただきたい」
初っぱなから荒れる予感にウツギとイイギリとアーモンドは、ニニーらしいと思う。

03 森の魔法使い

再び戻って冬の話。
村に就いたばかりで、まだ一人で辺りを飛び回っていたところにニニーが何をしていたか。
満月同様に月の力が強まる新月の夜、星明かりを頼りに森を仕切る長老魔法使いマジヨラムを訪ねて意見を聞いていた。
マジヨラムの隣には弟子で中年の魔法使いアララギが控えていた。
マジヨラムは静かに語り出した。
「魂は天上の物質で神そのもの。対して地上の物質である肉体に宿る精神は、人そのもの。神にとってよいことと、人が肉体から望むことは違っている。わかるかね？」
ニニーは少し考えた。
「肉体は生理的な快楽を求めて娯楽を好み、怠惰に過ごそうとします。対して魂は精神を鍛えて、意志を持ち、鍛練を求めます。肉体と魂、精神がどちらの影響を強く受けるか、分かれ目はどこにあるのでしょうか。わたしはやりたい人だったので、怠惰にながれたことがないのです」
ほお。
感心するようにマジヨラムが優しく微笑む。
「初歩の初歩は意識を集中すること。意識を操れず、野放しにしていると簡単に肉体的な生理に振り回される」
なるほど。
納得したようにニニーは深くうなずいた。
そして自分の考えを述べた。
「まず精神を内部認識と外部操作に分けます」
マジヨラムもアララギも、インプットとアウトプットのことだと理解する。
「自分のなかに具体的な認識を持つ力を想像力。事実を知る力です」
環境を内部に構築する力と二人とも納得する。
外を知る探査系の意識の使い方だ。
「そして想像したものを肉体を通じて伝えたり、作ったりする操作能力を表現力。声の調

子を整えて、言葉を選んで話すことも表現力なら、手足を動かして包丁を使って料理をすることも表現力」

意のままに操る操作系の意識の使い方だ。

「そしてそれらを続ける持続力が体力。想像力、表現力、体力の3つに注目して、子どもたちを育てていこうと考えています」

ふむ。

マジヨラムは、いいとも、悪いとも言わない。

「アララギはどうおもう？」

弟子に意見を求める。

「精神を想像力と表現力に分けて、肉体を体力としたのですな。わかりやすくいいとおもいます」

うなづくマジヨラム。

「ならば、アララギが手伝うとよい。教育の洗礼を受けていない認識が統一される前の子どもに接することは学びになるだろう」

一礼して応えるアララギに、ニニーが声をかける。

「魔法使いアララギの科学知識を受け継ぐガッツのある子どもを見つけたら、森に通わせたいです」

「おまちしています」

約束を交わして、0時過ぎにマジヨラムの家を出たニニーは暗がりに動く影を見つめる。

上空から目をこらして様子を見ていると子どもがほうきに乗る訓練をしているようだ。

しかしいっこうにふわりとも浮かない。

興味を持ったニニーは降りていって声をかける。

04 モモ

星たちに照らされ、逆行の中、ニニーが空から降りてくるさまをモモは憧れの眼差しで見詰めた。

ニニーの立派なほうきを見て、自分のボロボロのほうきを見て、「だからとべないのか？」と思う。

しかし、偉大な魔女の持ち物を貸して欲しいなど言えるわけがない。

「こっちのほうきで試してみたら？」

ニニーがモモに自分のほうきを差し出す。

「借りていいんですか？」

ほうきを交換するニニーとモモ。

期待を込めてモモがニニーのほうきにまたがる。

地面を蹴る。

しかし、ずどんと落ちる。ふわりとも浮かない。

ニニーはモモのほうきで雲まで急上昇する。
やっぱりほうきの問題じゃないんだ。魔女の才能がないんだ。
モモは我慢しきれず声を殺して大粒の涙をポロポロこぼす。
空から降りてきたニニーは、モモが泣いてるので驚く。
「魔女さまはどうしてとべるの。飛び方を教えて！」
詰め寄られてニニーはうろたえる。
「精神力で飛んでるらしいが、考えなくても飛べたから教えられない……」
うわーん。
号泣するモモを見て、ここまで悔しく思う根性があるなら、科学を覚えられないのでは
ないかと思う。
「どうして魔女になりたいの？」
モモの肩に手を起き、気の流れを感じようとする。
「わたしは農奴の子どもだから、魔女になるしか、村を出る方法がないの」
事情を察したニニーは、モモに機会を与えることにする。
「空を飛ばないと魔女にはなれないけど、知識を学ぶだけなら魔女でなくてもいい。森の
魔法使いの弟子にならない？」
え？
戸惑いと期待の入り交じった複雑な表情でニニーの言葉を待つ。
「わたしが起こす村の教育改革で、才能あるものは村から出す。覚悟はある？」
間髪いれずうなずく。
「死んでもこの世のすべてを知りたい！」
静かに首を横に振るニニーを見て、モモはできないといわれてると悔しくおもう。
「知ったらやらなくては。知っただけでは単なる娯楽で支援する理由がない」
パッとモモの顔が輝いた。
もっと先を信じてくれる。
覚悟を決めたモモは姿の見えないお月さまに感謝した。
はじまりをありがとう。
肩から手を離れたニニーも、モモの溢れるエネルギーを感じて、新月の出会いに感謝
する。
モモはみんなを照らす光になる。
成長を見守る覚悟を決めた。

05 町の領主

山奥の村での就任挨拶が済んだ春、町の大きな館に住む領主イチジクに挨拶する機会
を得る。
「つまり実践させてふるいにかけて、できるものを活躍させるわけだね。面白い。わたしの
息子も参加させよう」

賛成してくれたことにホッとするニニーの目の前に、いかにもやる気の無さそうな息子シブガキが現れた。

シブガキの後ろには、警戒心の強そうな居候イバラが控えている。「こちらは山奥の村で辺境使いをしている魔女ニニー。教育改革の実験をする。シブガキも参加しなさい。将来シブガキが治めることになる領土の村の実態を見てきなさい。イバラも付き添ってくれるね？」

戸惑うシブガキを見て、イバラが助け船を出す。「わたしがついていくのは構わないが、町育ちのシブガキは不便な田舎に行くことが嫌なのでは？」

シブガキが口を開きかける。

しかしそれより前にイチジクが断定するように言い聞かす。「だからこそ行く意味がある。わかるね？」

気が弱いところのあるシブガキは、強い父親に逆らえない。「はい、お父さん」

この場から逃れるためシブガキが言っていることが明らかだった。ニニーは荒れる予感に静かな闘志を燃やす。

06 シブガキとイバラ

村で暮らすようになったシブガキは、部屋に引きこもり、寝てばかりいた。ニニーが誘いに来ても、動こうとしなかった。そんなシブガキをイバラは叱らない。ニニーがイバラに問いかける。「なぜ注意しないの？」不愉快そうにイバラが答えた。「挑戦すれば失敗もある。失敗するくらいならなにもしない方がいい。神に祈って暮らしてた昔の方がいい」

そして僧侶たちの祈りをシブガキと共に行った。それからシブガキが眠る側で、イバラは木彫りの人形をナイフで彫り始める。

ニニーが村人からイバラについて聞いた話では、元領主で改革派だったらしい。山を削って、畑を作ろうとして、山崩れで街をつぶした。

死者も出た。責任を取って全財産を使い果たし、イチジクの居候として迎えられた。再戦を願うイバラに周囲は冷たく手のひらを返した。すべてをあきらめたイバラが何をして過ごしているのか、だれも知らない。木彫りの人形を子どもたちに配っていることだけが分かっている。

07 選別試験

5月ころ、森から魔法使いアララギが来て、街に送る子どもを選ぶ選別試験が行われた。

どういう風の吹き回しか、シブガキも来ていた。

後から、領主の息子で結果に関係ないからと分かるが、何も知らない大人たちはやる気になったことを喜んだ。

広場に集めた子どもたちにアララギが告げた。

「道具と材料を好きに使っていいから、おもちゃを作りなさい」

シブガキは、イバラにもらった人形を作ったフリをして提出した。

ニニーたちはすぐに気づいたが、嘘を暴かなかった。

アララギに理由を聞かれた。

「嘘を暴くことは簡単だが、初めて見せたやる気。嘘をついてでも街に行きたいなら行かせてみたい」

そういう事情ならニニーの判断に任せることにする。

アララギにはモモという感心事があったので、シブガキのことは忘れることにした。

農奴のモモは、農具なら作れるし、直せるだろう。

だが、持っていないだろうおもちゃと言われて対処できるか。

気づかれないようにアララギはモモを観察した。

案の定、どうしていいか分からなくて手が止まっている。

それでも席を立たない。

日が暮れて時間切れになるまで足掻き続けている。

考える基礎がないのだろう。

知ってることが少ない。

わたしの知識を与えればあるいは……。

声をかけようか迷っているとモモがいきなり立ち上がり走り出した。

ニニーが後を追う。

08 地上にて

思い詰めたモモは崖から落ちてニニーに助けられる。

地上にモモをおろすとニニーは語り出した。

「試験に落ちた以上、昼間は村の仕事を手伝わないといけない。仕事が終わってから森に通って勉強する気はある？」

チャンスをくれるとわかって、モモの決意が試される。

「もちろんです！」

ニニーはモモには分からない話を始めた。
「未来でコンピューターというものができる。便利だが大半の人は仕組みを知らない。使えるが作れないし、直せない。だからネジとバネと歯車で作って直せる日用品を作り上げる必要がある。その大任をモモに任せる」

なんの話か分からなかったが、できると信じてくれるニニーの期待に応えるためならなんでもしようと思う。

09 死んだ知識と生きている知識

翌日からモモは仕事を終わると夕飯を急いでかっこんだ。
森に住むアララギの家まで1時間は歩く。
くたくたで倒れそうでも、懸命に足を動かした。
アララギが最初にモモに話したことの意味は、モモが大人になるまで理解できなかった。

しかし素直なモモは、言われるままに受け入れる。
アララギは言った。
「考えてこたえにたどり着かないなら、過去に人々が出した結論を暗記しなさい。
死んだ知識は変化しない。足し算、引き算、割り算、かけ算、文字、これらは死んでいる。
生きてる知識は変化する。文字で表される技術たちだ」
知識が変化するという意味がモモにはいまいち分からない。
答えは1つじゃないの？

「試行錯誤の歴史を経て出された経緯を自分一人の頭で考え抜いて追うことは天才にしかできない。

モモは凡人なのだから、結果を暗記するだけでいい。
そういうものと受け入れて、考えなくていい」
素直にうなづく。

「まず文字を覚えて、計算できるようになりなさい。
他人と意思疎通するのに役立つから。
そこから先の応用は本で学びなさい」
本を読めるようになる期待でモモの頬はピンクに染まる。

「生きた知識が書いてある本は答えがひとつじゃない。なにを選ぶか、立場を決めなくてはならない。

立場が人生を分けることもある。
人生を賭けられるか？」
モモの答えは決まってる。

「はい、かけられます！」

迷いのないモモのまっすぐさをまぶしく感じた。
「夢を果たしたとき、暗記したことの意味を知るだろう」
願いを込めてアララギは語り終えた。

10 村の子どもたち

領主の息子で農作業をしたことがないシブガキは、泥まみれになることを嫌がった。
何もせず、ぼんやり布団のなかで過ごす日々が続いた。
表面上は何事もない日々が続いた。
ところがある日、大雨で水汲み場が流される。
村の運営責任者であるニニーは対策を求められた。
材料の丸太を山から切り出すことはできる。
だが、足場を組み立てる大工を雇う金がない。
最初に街に送り出した子どもたちの支援金に期待するしかなかった。

同じころ、アーモンドは仕事が終わると毎日河原で体を鍛えていた。
コンブという少年が隣に立ち、黙ってアーモンドの真似をした。
鍛え終わったアーモンドが話しかけると、レンジャーになって山を見回りたいから強くなりたいたいと言う。
アーモンドは何も教えず、コンブがやりたいようにやらせておいた。

一方、イイギリは、村の財政管理を任されて、帳簿をつけていた。
ヒジキという小柄な少年が、イイギリのところに来て、教えを乞う。
イイギリはヒジキに言った。
「何に使って、いくら売上、利益がどれだけでたか。いくら損したのか。状況を把握するためには記録を残すしかない。やり方を教えよう」
「はい！」

記録に必要な読み書きや計算を通じて、ヒジキは会計を身に付けていく。

うっかりがだいぶ直ったツウギは、蒸留水から薬を作る仕事を任されていた。
水汲みをしていると子どもたちが小遣い欲しさによってくる。
バケツの洗い方を教え、なるべくきれいな水を汲む方法を教えた。
1日手伝ったら1ミミあげよう。
一番上手にできた子にはもう1ミミあげよう。
いつもワカメという女の子が、一番のごほうびをもらっていた。
ワカメは働き者のかわいらしい人気者。

そして12月31日になり、ニニーがほうきで街まで一人10万ミミを集めに行った。

3人送って、1人しか支払えなかった。

残り二人は村に帰ることになった。

支払えたものには感謝の言葉をかけた。

支払えなかった二人には、あたたかい言葉をかけた。

「街でダメでも村に居場所がある。待っているから堂々と帰ってきなさい。一年一人で暮らしたことに価値がある。稼ぐすごさがわかるし、帰る場所である村の価値が分かるから」

うんうん。

二人ともうなずいた。

11 大工ウコン

子ども一人から回収した資金では、水汲み場を作り直すには足りない。

思案していると弟子探しの旅の途中で寄った青年大工ウコンが話をつけに来た。

「有能な子どもを弟子として引き取るかわりに材料さえ用意すればただで水汲み場を直してもいい」

ニニーは読み書き計算を習ったモモを推薦した。

最初は女だから渋っていたウコンだが、モモの働きぶりを見て、大変気に入る。

イギリスの指導でヒジキが予算管理をする。

ウツギの指導でコンブとワカメが現場を手伝う。

そうして出来上がった水汲み場に、ニニーがシブガキを誘い視察に来る。

村の設備を見回るのは領主の責務と言われて嫌々来たシブガキだが、水汲み場でバケツを洗うワカメに一目惚れする。

一緒に水汲みしたいが、領主の息子がやることではないと思ってる。

ウツギは、シブガキに過去の自分を重ねる。きっかけが欲しいことが分かる。

「誰でもできるならシブガキにもできるだろう。少し手伝ってほしい」

理由を与えられてしぶしぶ手伝うふうだが、本当は嬉しい。

その様子を見て、ニニーはシブガキをウツギに任せる。

1日手伝い1ミミもらう。

ワカメに会いたくて、ウツギにほめられたくて、シブガキは毎日水汲み場に通うようになる。

袋に1ミミ硬貨がたまっていくのが嬉しくて仕方がなかった。

12 モモの留学

時は流れ、バナラが王になり、ルビマンダ共和国の国境が開かれる。

ニニーは26歳。

モモは18歳。

一通り大工仕事を覚えたモモは、ルビマンダに留学するため、領主イチジクに旅費を出してもらう。

機械技術への道を歩み出す。

蒸気機関で機織りする工業の整備技師になる。

指導が終わり、師匠カイドウに整備を任されたが、うまくやれず、エルメダーラ王国に帰される覚悟をした。

しかし次も任せてくれた。

できるまで何度でもやり直させた。

モモはカイドウに深い恩義を感じた。

ところがカイドウは浮かぬ顔をしている。

モモが国に帰る時、カイドウらしくない遠回しな言い方をした。

「なんだ、あれだな。物事には要になる部分がある。それは簡単には知ることができない。しかしそれまでの経験から推論することはできる。モモならできるんじゃないかなと思う。あきらめるな」

モモはうなずいた。

13 シブガキの習い事

秋になり、村では盛大なお祭りが行われた。

舞台上で歌う歌手を見て、ワカメがシブガキに言った。

「わたしは挑戦する人が好きなの。あんな風に歌えるようになりたい！」

そう言い残して舞台の側に駆け寄るワカメを見送り、一人でシブガキは焦った。

何もしてこなかった。

今さら遅い！

いやでかいこととして逆転できる！

村祭りの花形の歌を歌えばワカメがほめてくれるかも？

そう思い詰めて、父であるイチジクに王都に出て歌を習いたいと言う。

ニニーは反対する。

「趣味を習うために王都へ行くなど金の無駄。自力でできないことは、教えられてもできるようにはならない。まず毎日歌ってから！」

へりくつをこねてシブガキが反論する。

「習ってからきちんと歌わないと変な癖がつくから嫌だ」

イバラも王都は誘惑が多く、悪いやつもいるから反対する。

しかしイチジクは見聞を広めるのはよいだろうと許す。学費と生活費の仕送りを約束する。

14 グリーン教

街に出たシブガキは、地味な発声訓練に飽きて、酒場で酒ばかりのんでいた。羽振りのよさに目をつけられる。約束の期日までに3倍にして返すから、有り金をすべて預けてくれと言われる。歌がダメでも10万ミミ稼いだらほめられる！そうして仕送り全部渡してしまう。しかし期日になっても現れず、部屋代も学費も払えず村に逃げ帰る。納屋の隅っこで震えて泣いてるシブガキを見つけたニニーは優しく諭す。「人と比べても意味がない。意識を集中することができないのに、集中して意図した結果を出すことができるわけがない」シブガキは耳をふさいで怒鳴り返した。「そんなこと分かってるよ！」怒鳴り返すニニー。「分かってないから段階飛ばして結果だけ求めたくせに」聞きたくないシブガキがワーワーとわめき散らす。「トゥンリミスは、パラレルワールドの中でも後からできた世界。先に生まれた別の世界の結果を知っている。いわば何度もやり直した結論が詰まってる」突然話がでかくなってシブガキはキョトンとする。「グリーン教は、人類が大人になったから生まれた。かつては人は知らないことだらけで、不安と恐怖に包まれた赤子だった。知識を得て、神の限界を知り、自分の方が上だと誇るようになった。でもどうしてもならないことはあって、守られていた子供の頃がなつかしくなる。けれども戻ることはなく、本当は神こそが人に頼って祈ってたというマグノリアのグリーン教の思想が生まれる」歴史を語っていると悟ったシブガキは、顔を隠して黙って聞いている。「しかし人類が大人になることと、個人として未熟でスタートラインに立てないことは別。過去には神が庇護してた人々を、人が庇護するようになる。だからわたしがシブガキに段階とばして結果だけ求めてもだめだよと言っている。人と比べないで、自分に必要なことをしないと。子どもの頃はしてたでしょ？」シブガキが、懐から巾着を出す。「あのころは嬉しかったな。ワカメと水汲みしてたころが俺のピークだった。この硬貨だけは使えなかった」貯めた1ミミ硬貨が、シブガキの良心なんだとニニーは思う。「わたしは優秀だったから、考えてもわからないやつに教える気がなくて、許すこともできなくて、部下を失うところだった。でもシブガキは無能だからこそやさしくなれるの

では？」

「言い方きついな」

「あとだめなやつにはだめなりに生きる方法をしめせるのでは？」

「たとえば？」

「妬んで他人の邪魔をしないと、見栄を張らないとか、素直になるとか、感情面をサポートしたら？ 自慢話と違って失敗談や悩んだ話は年下に受けるらしいよ」

「そんなかっこわるいことできない」

「今生の課題が1つも終わらず魂が育たないまま死んだら、来世も同じ問題を起こすよ。ならば今生で恥かいてできること増やして来世ではそれを生かしたら？」

「グリーンさまのために？」

「グリーンさまはわたしたち自身でもあるから、自分のためにでしょ？」

「自分は何もできないのに、自分よりすごいと認めるのは辛いよ」

「本当になにもできないのかな。できてることはあるのでは？」

落ち着きを取り戻したシブガキは、何もしてこなかったイバラが、どう過ごしていたのか興味を持つ。

シブガキが街に出ても村に残り、ずっと村の記録を書き残し続けていたことを行動を共にして知る。

木彫りの人形も子どもたちに配り続けていた。

でかいことより、できることを続ける方が大事なんだろうか。

自分が続けたいことはなんだろう。

シブガキは初めて自分と向き合った。

15 工場建設

モモがルビマンダ共和国から帰って、領主イチジクの領土の町に織物工場が建てられた。

少し金が足りなかったため、工場を担保に金貸しに借りた。

工場はできたが、肝心の蒸気機関が動かない。

必死に原因を探るが、何日も分からない。

工場失敗のニュースを聞きつけ、朝から金貸しが資金を取り立てにくる。

12時の鐘がなる前に稼働しないなら工場を売り払って資金を回収すると言われる。

モモは蒼白。疲れきってる。

「あと少しでわかりそうなんです！」

ニニーはモモを休ませることにする。

「まず食べて寝なさい」

ニニーもモモの隣で寝る。

モモが寝落ちたことを確認して、ニニーは単身、金貸しの元に乗る。

「モモは全然寝てないから頭が回らなくなってる。もう1日だけ猶予をください」

「ダメだ。待つ朝までだ」

押し問答を繰り返して朝になる。

夜中に目覚めてニニーがいないことに気づいたモモは、ニニーが無茶をしてないか心配する。

寝てすっかりした頭で考え抜くモモ。

早朝、ニニーが金貸しを連れて工場にくる。

ニニーはモモを信じて堂々としている。

しかし、工場の煙突から煙は出てない。

金貸しはつぶやいた。

「終わったな」

その時、轟音と共に煙突から煙が上がる。

モモが原因を突き止めなおしたのだ。

煙を見て駆けつけるシブガキがモモをほめる。

「モモはすごいやつだな」

ニニーは、シブガキの変化に驚く。

「直したモモもすごいけど、モモをすごいと言えるシブガキも大人になったね」

笑ったままニニーは寝落ちてしまう。

そしてモモは自らが技術になる。

シブガキは褒めて育てる人になる。

16 再会

ニニーが46歳の時、王バナラがアイデアを募集する。

村で行った教育改革を全国に広めるため、ニニーが応募する。

しばらくすると王妃クミンからお茶の誘いが来る。

話を聞きたいと書いてある。

言い合う覚悟で乗り込むと、王バナラも王妃クミンも、なにがそんなに嬉しいのか大変ニコニコしている。

おまけにニニーの好きなサンサリーンの甘い焼き菓子まで用意されてる。

クミンが言う。

「山奥の村では手に入らないでしょう。今でも好きかしら？」

バナラも言う。

「食べながら、これまでニニーが何をしてきたのか、詳しく話しておくれ。時間はたっぷりあってあるから」

ニニーは、自分で考えられる子どもを外に出して稼がせて、教えないと動けない子ど

もは村に残して鍛練してきたエピソードを語る。

だんだん16歳で亡くした母と話しているような懐かしさに包まれる。

まるでバナラとクミンが本当の両親のような錯覚に陥る。

国父、国母とはそんなものか。

それ以上深く考えることはなかった。

バナラもクミンも、ずっと応援していたことを言わない。王族の好意は命令になりかねない。二人ともニニーには自由でいて欲しいかった。

バナラは思慮深そうに話し出す。

「大臣の中には反対しているものもいる」

ニニーは承知しているとばかりにうなずいた。

そしてニニーが城のベランダから演説することに決まった。

改革の話聞きつけた国民が、城下町の広場にひしめいていた。

「自由は自活したものが金で買う権利。身分をこえて平等に機会を与えます！」

賛同の大歓声！

「競争のスタートラインに立てないものは、教え導き守ります

みなさんは、どちらの生き方をえらびますか？」

世界の扉は開かれた！

トゥンリリミス TRPG すぐろく「村の再生」に続く。

トッソリミス寓話「魔女と王さま」(後編4)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
